

# 羊蹄山

太田英順<sup>1)</sup>

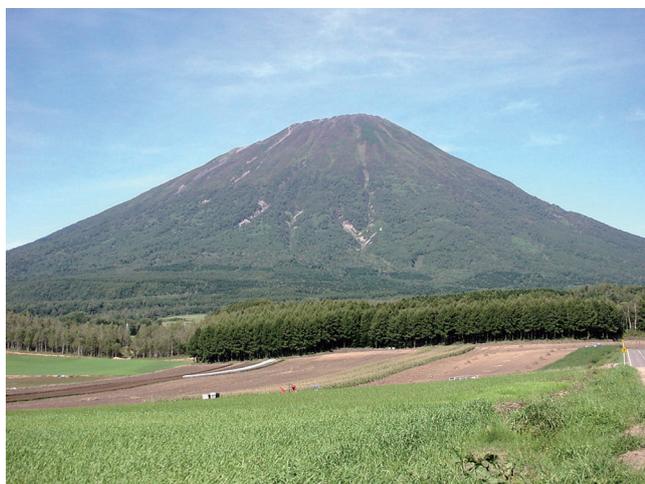
## 1. 名前のいわれ

羊蹄山<sup>ようていざん</sup>（1898 m）は美しい円すい型の成層火山です。別名蝦夷富士とも呼ばれ、西南北海道で一番の高さを誇っています（第1図、第2図）。日本書紀には「後方羊蹄山」という名が記載されており、国土地理院の地形図でも、1969年11月発行の5万分の1地形図「留寿都」<sup>るすつ</sup>で羊蹄山と書き改められるまでは、後方羊蹄山という名が使われていました。その地形図の山頂部には「羊蹄山」と印刷されていますが、山麓には「後方羊蹄山の高山植物帯」という印刷があり、名称変更に伴うちょっとした混乱を感じます。

完全な独立峰である羊蹄山をとりはさむように、北側に尻別川が南側に真狩川<sup>まっかり</sup>が流れていて、ニセコ町で合流しています。この特徴的な地形を表すアイヌ語のマク・カリ・ベツ（山の・後ろを回る・川）が羊蹄山のもうひとつの名前である真狩岳<sup>まっかりだけ</sup>の語源となっています。ちなみに明治30年に羊蹄山頂に設置された一等三角点の正式名称は真狩岳です。これらのことから想像できるように、この山の名の由来と歴史はちょっと複雑です。

この山は、もともとはアイヌ語でマテネシリ（女山）と呼ばれていました。羊蹄山の北を流れる尻別川の名はアイヌ語名のシリ・ペツ（山に沿って下る・川）に由来しますが、これがなまって、和人はこの川の周辺の地域名（現在の後志<sup>しりべし</sup>）を後方・羊蹄（しりへ・し＝しりべし）と呼ぶようになり、そこにあるひとき目立つ大きな山を後方羊蹄山（しりべしやま）と名づけました。この名が簡略化されたうえ読み方まで変化して、いつの間にか羊蹄山（ようていざん）となってしまったわけです。

羊蹄山の南東にある尻別岳は札幌から車で走って中山峠を越えた時に羊蹄山より先に目に入り、しかも山の形が似ているため「にせ羊蹄」などと呼ぶ人もいます。一方、1712年の和漢三才図絵にある「蝦夷之図」には、羊蹄山そのものが尻別嶽と記載されています。これではどちらがどちらの偽物なのかよくわかりません。昔のアイヌの人達は現在の尻別岳をピンネシリ（男山）と呼び、女山である羊蹄山とは夫婦関係にあると見なしていたようです。



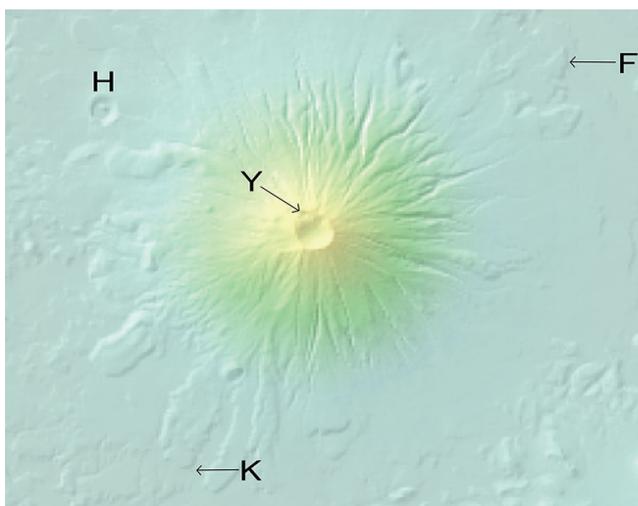
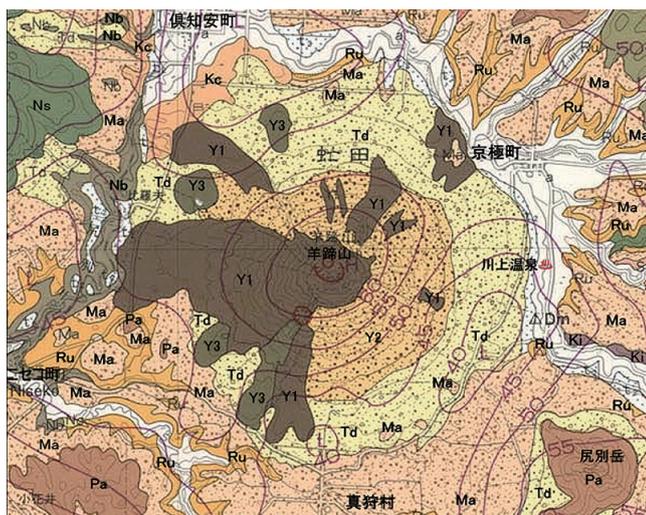
第1図 真狩村からの羊蹄山。



第2図 倶知安町からの羊蹄山。

1) 産総研 北海道産学官連携センター

キーワード：北海道、蝦夷富士、銘水、ふきだし公園



第3図 羊蹄山の地質図（左）と地形レリーフ（右）。（縮尺は少し異なります）<sup>(注)</sup>

第1表 地質図（第3図）の説明．

完新世	Td	(崖錐堆積物) 礫・砂及び粘土, 火砕流堆積物を伴う
更新世	Y3	(羊蹄山寄生火山) 輝石安山岩溶岩及び火山碎屑物
	Y2	(羊蹄山主山体) 火山岩塊・火山弾・火山灰・軽石及びスコリア
	Y1	(羊蹄山主山体) 輝石安山岩溶岩
	Ma	(真狩別層) 火山砂・火山灰・火山灰土・スコリア及び粘土
	Kc	(倶知安盆地堆積物) 凝灰質砂・軽石・礫及びシルト
	Ru	(留寿都層) 軽石・火山灰・砂及び粘土
	Ki	(喜茂別火砕流堆積物) 流紋岩質溶結凝灰岩
	Ns	(ニセコアンヌプリ火山) 輝石安山岩溶岩及び火砕岩
鮮新世	Nb	(ニセコアン層) 火山灰・礫・軽石・砂・シルト及び輝石安山岩溶岩
	Pa	輝石安山岩溶岩及び火砕岩

## 2. 火山活動と地質

5万分の1地質図幅「留寿都」(斎藤ほか, 1956)によると, 羊蹄山本体を作った噴火活動は3つの時期に分けられます。

1. 現在の火山体の大部分が作られました。
2. 溶岩流が西と北東方向に流れ出しました。
3. 噴出中心が東に移動し, 現在の頂上部が出来ました。

山体の大部分を形成した第1期の活動が最も長期間続いていたはずなので, 「第2・3期のような短期間のエピソードに細分すれば良いのに」と思われるかもしれませんが, 現在地表から全く見えない部分(つまり第1期の噴出物のほとんど)については, 研究が容易には進まないため, 細分は困難なことなのです。

本体の形成後, 側噴火により北山(第3図の地形レリーフのY), 半月湖(H)など, 少なくとも6個の寄生火山が生成しました。これらの寄生火山や溶岩流の形は現在の地形にも反映されていて, 羊蹄山の形が完全な円錐形ではないことの原因となっています。地質図と地形レリーフを比較して見ると, 安山岩溶岩の流れの様子や火口・側火口の位置と形がよくわかります。

## 3. 湧水

火山灰や溶岩を順番に積み重ねてできる成層火山の裾野には, しばしば湧水が見られます。日本を代表する成層火山の富士山周辺には泉が多数分布していますし, 北海道北部の日本海に浮かび「利尻富士」の愛称を持つ利尻山の「甘露泉水」や, 道東の斜里岳山麓の「来運の水」も銘水とし



第4図 ふきだし公園：一日約8万トンの銘水が文字通り吹き出してあり、上水道や工業用水としても使用されています。



第5図 カムイワッカの水：道道66号線のすぐ脇にある、アクセスの良い銘水です。

て親しまれています。これらはいずれも、成層火山上に降った雨と雪が地下へ浸透し、斜面に積もった水を通す地層（火山灰など）の中を数十年～数千年という歳月を経て流れ落ちる間に濾過され、ミネラル成分を添加された最良のミネラルウォーターとなって山のふもとで湧き出てくるものです。

豪雪地帯にあり「蝦夷富士」として親しまれている羊蹄山のふもとにも、質・量ともに優れた泉が10カ所以上知られていますが、一般に開放されていて間近まで車で乗りつけられる人気スポットとなっているのは、ふきだし公園（第3図の地形レリーフのF）と南麓の真狩村富岡にあるカムイワッカの水（K）です。いずれの湧水の温度も四季を通しほぼ一定の6～7℃で、著名な憩いの場所として毎日多くの観光客と水を求める市民を集めています。ここ

でもう一度第3図の地質図と地形レリーフを比較して見ると、ふきだし公園（第4図）もカムイワッカの水（第5図）も溶岩流の末端部に分布していることが読み取れます。溶岩流の下にある地層をゆっくり流れ下った地下水が溶岩の末端部で地表に吹き出てくるという、興味深い事実です。

(注) 地質図は地質調査所発行の20万分の1地質図幅「岩内」を基に作成しました。地形レリーフのイメージはDAN 杉本さん作成の「カシミール3D」と、国土地理院発行の「数値地図50mメッシュ(標高)」を用いて作成しました。

## 文 献

斎藤昌之・藤原哲夫・石山昭三・松井公平（1956）5万分の1地質図幅「留寿都」及び同説明書。北海道開発庁，33+14p.

OHTA Eijun(2015) One hundred mountains in Japan in geology; Mt. Yotei.

(受付：2014年12月9日)